

9/26 SAT. 27 SUN.

第683回 定期演奏会

2020年9月26日(土) 6:00p.m. サントリーホール

Subscription Concert Series No.683

Sat. 26th. September 2020, 6:00p.m. Suntory Hall

新潟特別演奏会 2020 中秋

2020年9月27日(日) 5:00p.m. “リゅーとぴあ”コンサートホール

Niigata Special Concert 2020 Mid-Autumn

Sun. 27th. September 2020, 5:00p.m. Ryutopia Concert Hall

尾高 忠明 [指揮]

川久保 賜紀 [ヴァイオリン]

グレブ・ニキティン [コンサートマスター]

Tadaaki Otaka, Conductor

Tamaki Kawakubo, Violin

Gleb Nikitin, Concertmaster

リャードフ:

交響詩《魔法にかけられた湖》作品62 (7')

A. Liadow:

The Enchanted Lake, Op.62 (7')

ショスタコヴィチ:ヴァイオリン協奏曲

第1番 イ短調 作品77 (35')

D. Shostakovich: Violin Concerto

No.1 in A minor, op.77 (35')

I. ノクターン: モデラート

II. スケルツォ: アレグロ

III. パッサカリア: アンダンテ

IV. プルレスカ: アレグロ・コン・ブリオ

I. Nocturne: Moderato

II. Scherzo: Allegro

III. Passacaglia: Andante

IV. Burlesque: Allegro con brio

休憩 (20')

Intermission (20')

バルトーク: 管弦楽のための協奏曲

Sz.116 (36')

Bartók B.: Concerto for Orchestra,

Sz.116 (36')

I. イントロダクション

II. 対の遊び

III. エレジー

IV. 中断された間奏曲

V. フィナーレ

I. Introduzione

II. Presentando le coppie

III. Elegia

IV. Intermezzo interrotto

V. Finale

●主催/公益財団法人東京交響楽団(9/26)、公益財団法人新潟市芸術文化振興財団(9/27)

●特別協賛/株式会社エイチ・アイ・エス(9/26)

●助成/文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)|独立行政法人日本芸術文化振興会(9/26)
文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)|独立行政法人日本芸術文化振興会(9/27)

※当初発表の出演者・曲目の一部が変更になりました。

楽曲解説はP.12をご覧ください



9/26 SAT. 27 SUN.



©Martin Richardson

Tadaaki Otaka

Conductor

尾高 忠明 [指揮]

1947年生まれ。国内主要オーケストラへの定期的な客演に加え、ロンドン響、ベルリン放送響など世界各地のオーケストラへ客演。これまで91年度第23回サントリー音楽賞受賞。93年ウェールズ音楽演劇大学より名誉会員の称号、ウェールズ大学より名誉博士号、97年英国エリザベス女王より大英勲章CBEを、さらに99年には英国エルガー協会より、日本人初のエルガー・メダルを授与されている。2012年有馬賞(NHK交響楽団)、14年北海道文化賞、18年度関西音楽クリティック・クラブ賞本賞、大阪文化祭賞、日本放送協会放送文化賞、19年第49回JXTG音楽賞洋楽部門本賞を受賞。

現在NHK響正指揮者、大阪フィルハーモニー交響楽団音楽監督、BBCウェールズ・ナショナル管桂冠指揮者、札幌響名誉音楽監督、東京フィルハーモニー響桂冠指揮者、読売日響名誉客演指揮者、紀尾井ホール室内管弦楽団桂冠名誉指揮者。東京藝術大学名誉教授、相愛大学、京都市立芸術大学客員教授、国立音楽大学招聘教授。

Born in 1947, OTAKA studied at Toho Gakuen School of Music under Hideo SAITO, a professor known for teaching Seiji Ozawa and Hiroshi Wakasugi. He then moved to Vienna to study with Hans Swarowsky and Spannagel.

As Japan's leading conductor, OTAKA conducted all major Japanese Orchestras. He is also a popular figure throughout the world particularly in the UK, where he is invited as Guest Conductor to the London Symphony, London Philharmonic, BBC Symphony etc. He made his Proms debut with the BBC National Orchestra of Wales in 1988. He also received invitations to the Berlin Radio Symphony Orchestra, Bamberg Philharmonic and many others.

In 1993, the Welsh College of Music and Drama conferred an Honorary Fellowship on OTAKA. He also holds an Honorary Doctorate from the University of Wales. In 1997, he was awarded the CBE, in recognition of his outstanding contribution to British musical life. He is also the first Japanese to receive the Elgar Medal in 1999, for his continuous efforts at spreading the works by Elgar outside the UK.



©Yuji Hori

Tamaki Kawakubo

Violin

川久保 賜紀
[ヴァイオリン]

2001年サラサーテ国際ヴァイオリン・コンクール優勝、2002年チャイコフスキー国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門最高位受賞以来、クラシックから現代まで、幅広いレパートリーを手がけ、国内外でリーディングソリストとして活躍を続けている。若くして、主要な北米オーケストラと共演し、豊富なステージ経験を積む。日本では1997年、チョン・ミョンフン指揮アジア・フィルのソリストとしてデビュー。以後、国内外様々なオーケストラと共演を重ね、高度な技術と作品の品位を尊ぶ深い音楽性に高い評価を得ている。近年は自ら企画するコンサートを行うなど、コンサート・プロデューサーとしての才能も発揮、後進の指導にも積極的に取り組み、2018年より桐朋学園大学院大学(富山校)教授に就任。

オフィシャル・ホームページ: <http://www.tamakikawakubo.com/>

Violinist Tamaki Kawakubo, a formidable artist possessing a masterful technique and a tone that “ranges from velvety soft to gripping drama” has been established to be a veteran of the concert stage. In 2002, she was awarded Silver Medal at the International Tchaikovsky Competition and she was the first-prize winner of the 2001 Pablo Sarasate International Violin Competition. In addition to her career as a soloist, her passion for chamber music has taken her to have opportunities to perform in various Music Festivals around the globe. Miss Kawakubo plays on an instrument kindly on loan from the Ryuji Ueno Foundation.

9/26 SAT. 27 SUN.

アナトリー・リャードフ(1855～1914)

交響詩《魔法にかけられた湖》作品62

19世紀以来、ロシアの作曲家たちの多くは自国のフォークロア(民間伝承)に魅せられてきた。彼らにとってロシアの民話や民謡は作曲家としてのアイデンティティのよりどころとなっただけでなく、創作のインスピレーションや魅力的な題材を与えてくれる素材の宝庫でもあったのである。

19世紀後半から20世紀初頭に活躍した作曲家アナトリー・リャードフもまた、ロシアのフォークロアに魅せられた作曲家のひとりであった。彼は独自の世界観を持った作曲家だった。というのも、彼が残した70曲近い作品はどれも比較的小規模な作品であり、ソナタや交響曲といった大作は手掛けていないのである。

彼の作品の多くは音の生みおとされた瞬間を繊細なタッチで書きとめたかのような一種の細密画であり、その筆遣いは彼が終生関心を持ち続けたフォークロアの世界を生き生きと、また、美しく幻想的に描き出す。本日演奏する交響詩《魔法にかけられた湖》作品62は、ロシアの伝説に登場する精霊を描いた《キキモラ》作品43、ロシアの有名な魔女を描いた《バーバ・ヤガ》作品56とともに、「3つのロシア民話」の中の1曲として作曲された。

《魔法にかけられた湖》は、特定の物語による作品ではなく、あたかもロシアの御伽噺に出てきそうな湖の情景を作曲者が想像しながら描いた作品である。「すべてが止まってしまったかのような湖の静けさのなか、突然何かが物音をたて、湖上をそよ風が吹き渡る」。リャードフはその情景についてこのように語っている。

向井 大策 TEXT by Daisaku Mukai

作曲：1909年

初演：1909年、サンクトペテルブルク、ニコライ・チェレブニン指揮

編成：フルート3、オーボエ2、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、ティンパニ、タムタム、チェレスタ、ハープ、弦5部

ドミトリ・ショスタコーヴィチ (1906 ~ 1975)

ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 作品77

今年公開された映画『剣の舞 我が心の旋律』には、ショスタコーヴィチとダヴィッド・オイストラフがハチャトゥリアンとともに街頭で弦楽器を演奏するシーンがあった。ショスタコーヴィチが得意とした楽器はピアノであったが、生涯に2曲作曲されたヴァイオリン協奏曲にはこの楽器への関心が色濃く反映されている。

ショスタコーヴィチが初めてヴァイオリン協奏曲作曲の構想を述べたのは1934年だった。

1945年にヴァイオリン・ソナタの作曲が試みられたが途絶、1947年夏に始まった新たなヴァイオリン曲の作曲が『ヴァイオリン協奏曲第1番』へと結実した。第1楽章の自筆譜には「1947年11月12日」、第2楽章には「12月6日」、第3楽章には「1948年1月19日」、第4楽章には「3月24日」と完成日が記されている。

終楽章の作曲中、当時のソビエトの主要作曲家を西欧的モダニズムに追隨する「形式主義者」として糾弾する「ジダーノフ批判」が始まった。集会で自己批判などの演説をも余儀なくさせられた作曲家は、自宅に戻ると協奏曲の作曲に「心の平安」を見出したという。結果的に協奏曲の初演は完成から7年余を経た1955年に持ち越された。作品は初演の独奏者ダヴィッド・オイストラフに献呈されている。

第1楽章 ノクターン：モデラート。三部形式。独奏ヴァイオリンが息の長い瞑想的な旋律を奏でてゆく。旋律は12の半音すべてを用いるように動き、しばしば無調へと近づく。

第2楽章 スケルツォ：アレグロ。独奏ヴァイオリンはオクターヴ奏法が多用され、ショスタコーヴィチの署名音型「DSCH」も移調されて現れる。中間部は4分の2拍子、2つの対比的な楽想からなる。

第3楽章 パッサカリア：アンダンテ。パッサカリア主題はヘ短調、交響曲第7番「レニングラード」第1楽章の「戦争の主題」を連想させる。主題は8回繰り返され、独奏ヴァイオリンの長く技巧的なカデンツァに入る。アタッカで第4楽章へと続く。

第4楽章 ブルレスカ：アレグロ・コン・ブリオ。コーダを伴うロンド。当初は冒頭のロンド主題も独奏ヴァイオリンが演奏するように書かれていたが、独奏者への負担を考慮して初演直前に書き改められ、初演の指揮者ムラヴィンスキーの表現を借りれば「オイストラフの右手に血の通う時間を作るようにした」。後半でパッサカリア主題が再現、大きく白熱して終わる。

高久 暁 TEXT by Satoru Takaku

作曲：1947年～1948年3月

初演：1955年10月29日サンクトペテルブルク（レニングラード）、ダヴィッド・オイストラフ独奏、エフゲニー・ムラヴィンスキー指揮、レニングラード・フィルハーモニー管弦楽団

編成：ヴァイオリン独奏、フルート3（ピッコロ持替1）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替1）、クラリネット3（バス・クラリネット持替1）、ファゴット3（コントラ・ファゴット持替1）、ホルン4、バス・チューバ1、ティンパニ、シロフォン、タンバリン、タムタム、チェレスタ、ハープ2、弦5部

9/26 SAT. 27 SUN.

ベラ・バルトーク (1881 ~ 1945)

管弦楽のための協奏曲 Sz.116

ファシズムの台頭によりアメリカへ渡った欧州人は多くいるが、バルトークもそのひとりで、母国ハンガリーがナチス・ドイツ下になることを恐れて1940年に渡米する。アメリカではピアニストとして演奏活動し、大学で民俗音楽の研究に勤しむが、まもなくして白血病を発病し働けなくなり生活に困窮してしまう。そんなバルトークを助けようと1943年にボストン交響楽団の指揮者セルゲイ・クーセヴィツキーが管弦楽曲を委嘱する。バルトークは1942年に出版社のレイフ・ホークスから協奏曲の作曲を勧められており、また、渡米の際にはシカゴ響に届けるためにコダーイの「管弦楽のための協奏曲」の総譜を携えていた。そのようなタイミングで来た作曲委嘱から生まれたのがコダーイの作品と同名の「管弦楽のための協奏曲」だ。オーケストラの楽器がソロもしくはセクションごとに活躍する作品であり、バルトークが採集・研究していたハンガリーをはじめとする東欧の民俗音楽の要素を使って、彼ならではの音楽が展開していく。クーセヴィツキーが「ここ25年間に作曲された管弦楽曲の中で最も素晴らしい作品」と絶賛した傑作だ。

イントロダクション 序奏とソナタ形式の楽章。低弦が奏でるハンガリー民謡に基づく旋律で始まり、舞踊音楽ヴェルブンコシュ風の旋律を経て、主部へ。セルボ・クロアチア民謡風の決然とした第1主題と、アラブ・ビスクラ地方の民謡風の静かな第2主題によってダイナミックに展開する。

対の遊び 5つの管楽器が“対”で活躍する楽章。小太鼓に導かれ、セルビアの民俗舞踊コロ風の主題をファゴット2人が演奏。続いて4つの管楽器が順に登場してコロやダルマチア地方の旋律を奏でる。金管楽器のコラールののち、5つの管楽器がさらに活躍する。

エレジー 第1楽章序奏の主題による楽章で、バルトークらしい“夜の音楽”が彩る。

中断された間奏曲 木管楽器が奏でる民謡風の主題と、ヴィオラなどが奏でるジグモント・ヴィンツェ (1874~1935) のオペレッタ「ハンブルクの花嫁」のアリア「ハンガリーよ、おまえは美しい」からの抒情的な主題による間奏曲。これを“中断”するのが、ショスタコーヴィチの交響曲第7番「レニングラード」第1楽章 (バルトークは1942年に米国初演をラジオで聴いている) の引用とも、レハールのオペレッタ「メリー・ウィドウ」のアリアの引用とも言われる陽気な音楽で、それをトリルで笑いとばす。

フィナーレ トランシルヴァニア地方の羊飼いが吹くホルンの合図で始まり、民俗舞踊ホラ風の音楽がロマの楽団の響きを模して (民族楽器コブザ風のピツィカート、ロマ風のヴァイオリン) 表現される。スロヴァキアの豚飼いの笛を思わせる主題をトランペットが奏でたのちフーガ風に展開し、クライマックスへと進む。

榊原律子 TEXT by Ritsuko Sakakibara

作曲: 1943年

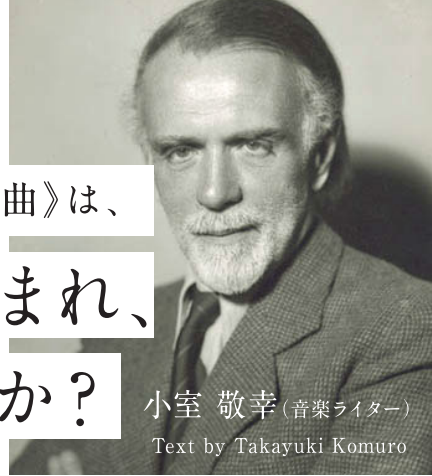
初演: 1944年12月、セルゲイ・クーセヴィツキー指揮、ボストン交響楽団

編成: フルート3 (ピッコロ持替1)、オーボエ3 (イングリッシュ・ホルン持替1)、クラリネット3 (バス・クラリネット持替1)、ファゴット3 (コントラ・ファゴット持替1)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、バス・チューバ、ティンパニ、小太鼓、大太鼓、タムタム、シンバル、トライアングル、ハープ2、弦5部



Symphony Lounge

[シンフォニー・ラウンジ]



《管弦楽のための協奏曲》は、

いかにして生まれ、

発展したのか？

小室 敬幸 (音楽ライター)

Text by Takayuki Komuro

Bartók Béla X Kodály Zoltán

1918年11月に第一次世界大戦が終わった。この頃、美術の世界で新たな潮流として注目されていたのが、ワシリー・カンディンスキー(1866~1944)らによる表現主義的な抽象画である。アーノルト・シェーンベルク(1874~1951)が同時代に試みていた無調の音楽にも共感・呼応しながら抽象絵画は発展していくが、当然反発するものたちも現れた。反表現・反抽象主義を掲げた画家たちは「新即物主義(ノイエ・ザッハリッヒカイト)」と称されるようになり、この新しい考えに作曲家として真っ先に飛びついたのがパウル・ヒンデミット(1895~1963)だったのである。

現実社会を題材にした新即物主義を、ヒンデミットは様々な音楽を参照した折衷主義という形で音楽に置き換えたのだが、その最たるものが独奏楽器を伴うカンマー・ムジーク(室内楽)シリーズの第2~5番(1925)だといえる。実質的には協奏曲なのだが、楽器編成が小さいために聴覚上の印象は、ロマ

ン派的な協奏曲というよりもバロック時代の合奏協奏曲(コンチェルト・グロッソ)に近い。この合奏協奏曲的なバランスを、大オーケストラへと規模を拡大したのがヒンデミットの《管弦楽のための協奏曲》(1925)だったといえるだろう。特に第1楽章ではオーボエ、ファゴット、ヴァイオリンの三重奏が合奏協奏曲における独奏楽器群(コンチェルティーノ)の役割を担うことから、明確にバロック時代の協奏曲を参照している。加えて、編成が大きくなることでヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)やヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~1791)らが作曲した協奏交響曲(シンフォニア・コンチェルタンテ)にも近似している。

そもそも「協奏曲」というと、華やかな独奏楽器の技巧性に注目されがちだが、語源に立ち戻ると「対比」と「協調」という相反する意味にたどり着く。つまりは、独奏楽器(群)と管弦楽全体を一緒に「協調」させる部分と、独奏楽器(群)を

《管弦楽のための協奏曲》は、 いかにして生まれ、発展したのか？

軸にした小編成で「対比」をうみだす部分とを交互に聴かせていくことに、主眼がある。そう考えれば、合奏協奏曲こそが協奏曲本来の姿といえるのだ。

こうしてヒンデミットにより生み出された20世紀版の合奏協奏曲である《管弦楽のための協奏曲》はその後、20～30代ぐらいの若い世代の作曲家が次々と手掛けるようになり、その中にはアメリカのウォルター・ピストン(1894～1976)、ヴァイオリニストとして著名なアドルフ・ブッシュ(1891～1952)らが含まれている。もう少し成熟した世代の作曲家によるものとしては、イタリアのジャン・フランチェスコ・マリピエロ(1882～1973)とアルフレード・カゼッラ(1883～1947)の作品が注目に値するだろう。前者はオーケストラの中から7種の楽器群が順番に独奏扱いされていき、後者では特定の楽器に偏ることなく管弦楽全体をソリストイック(独奏的)に扱うのが特徴だ。これらの延長線上に、位置しているのがゾルターン・コダーイ(1882～1967)とベラ・バルトーク(1881～1945)の《管弦楽のための協奏曲》なのである。

1940年に書かれたコダーイの作品は、作曲者自身によれば技巧性ではなく楽器ごとの音色の対比をコンセプト

としているために「協奏曲」と名付けられたという。一方、1943年に書かれたバルトークの作品も、第2楽章〈対の遊び〉では明確に音色の対比に主眼が置かれているが、5楽章全体を貫くのは管弦楽全体をソリストイックに活躍させる見せ場の多さ。これこそが数ある《管弦楽のための協奏曲》のなかでバルトークだけが突出して演奏機会が多い理由のひとつだろう。

1950年代以降に作曲された《管弦楽のための協奏曲》のなかでは、1954年に完成したルトスワフスキ(1913～1994)によるものがバルトークに次いで演奏頻度が高いため、広く知られている。だが、実際には他にも数多くの現代の作曲家が手掛けていることはもっと知られていいだろう。なんと8曲もまで作曲しているゴッフレド・ペトラッシ(1904～2003)に、ペトラッシの弟子でもあるエンニオ・モリコーネ(1928～2020)も1957年に作曲。指揮者として有名なレナード・バーンスタイン(1918～1990)やスタニスワフ・スクロヴァチェフスキ(1923～2017)、日本人では三善晃(1933～2013)や北爪道夫(1948～)が作曲している。《管弦楽のための協奏曲》は決して、バルトークだけの占有物ではないのだ。

※9月26、27日に演奏を予定しておりました「コダーイ：管弦楽のための協奏曲」は曲目変更になりました。